

《論文》

保育指導「環境」領域の「自然体験」を重視した
教育課程の構想

～小学校との接続の具体化～

鮫島 準一

保育指導「環境」領域の「自然体験」を重視した 教育課程の構想

～小学校との接続の具体化～

鮫島 準一

和文抄録：幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続がなかなか進まない状況の中、幼稚園教育要領及び小学校学習指導要領が改訂され、自然事象や社会事象等を対象とする「環境」領域の保育指導においても小学校教育を意識した教育課程の見直しが求められている。本稿では、自然認識を深めていく小学校以降の教育を見据えたとき、幼児期において体験させておくことが望ましい「自然体験」及び「自然体験」を重視した教育課程を構想していく上での留意点等について明らかにしようとしたものである。

キーワード：教育課程、自然体験、幼小接続、保育指導「環境」、理科

はじめに

「幼稚園教育要領」(H29.3)では、小学校以降の子供の発達を見通しながら「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目が示されている。この中の「自然体験」に関する「育ってほしい姿」では、「自然体験」が子供の発達において事物・現象への好奇心や探究心を育むといった面で発達に深く関わっているという認識が窺える。

「自然体験」の重要性を認識しながら、本稿においては、「保育指導「環境」領域における「自然体験」の構想～小学校『生活科』『理科』との接続を見据えて～」(令和2年2月鹿児島国際大学福祉社会学部論集 第38巻第4号 鮫島準一)を踏まえて、自然認識を深めていく小学校以降の教育を見据えた幼稚園教育における教育課程編成の在り方について論究したいと考える。その際、「子供の経験の連続性」を大事にして小学校の「生活科」や「理科」の学習内容との関連を考慮しながら、保育指導「環境」領域において自然体験をどのようなことに留意しながら教育課程の中に位置づけていくかを明らかにしていきたい。

I 研究の背景

1 幼稚園教育要領と自然体験

幼稚園教育要領では、今後子供たちが社会の急激な変化に対応し、自らこれからの社会を切り拓いていくために必要な資質・能力として、豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」、気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試した

り、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」、心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」が示されている。そして、この幼児期に育みたい資質・能力は、幼児の自発的な活動である遊びや日常生活の中で、それぞれの感性を働かせて、自然の事物・現象（自然の事象）のもつよさや面白さ、不思議さ、美しさ等に気付いたりできるようになったことを生かしながら、試したり、工夫したりして育てていくことが大切であると示されている。

一方、幼児教育においては、小学校の教科指導のように指導内容が具体的に設定され意図的に知識等を学び取らせていくものではないとされているが、保育者として今後小学校でどのような自然事象に関する学習を行って知識等を獲得していくのかを理解して保育していくことは極めて重要なことであると考えられる。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10項目が示され、小学校と子供の姿を共有することで、小1プロブレム解消のための円滑な幼小接続が推進されやすくなったが、具体的な接続のための教育課程の編成及び指導の在り方等については研究を進めていくことが急がれている。

（1）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と自然体験

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることによって、幼稚園で育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる期待される姿である。これは、到達目標でないことや個別に取り出されて指導されるべきでないことに十分留意する必要があるが、保育者はここでの自然体験が原体験となって今後小学校の「生活科」「理科」等へつながっていくことを十分認識しておく必要がある。

具体的には、遊びの中で自然と関わる体験をとおして育ってほしい姿として、「(6) 思考力の芽生え」「(7) 自然との関わり・生命尊重」が深く関連していると考えられる。ただ幼稚園と小学校では、子供の生活や教育方法が異なっているため、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」からイメージする子供の姿にも当然違いが生じることが考えられる。したがって、教育課程を編成するに当たって幼稚園と小学校において具体的な子供の姿を共有できるようにしておく必要がある。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中で、「生活科」「理科」と深く関連があり、どのような具体的な姿を描いて関わっていけばよいかが、次のように示されている。

（6）思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

（7）自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを持ち合わせて関わるようになる。

「思考力の芽生え」は、「資質・能力」の「考える力」と捉えられ、身近な自然事象を含む事象や物に自分から関わり、「どうなっているのか」「どうしたら上手くいくか」とか「このあとどうなるか」など考え、工夫していくことが重要になってくる。そこでは、保育者が子供の考えを引き出し、工夫に向けて導いていくことも大切である。また、友達とのやり取りの中で自分の考えをしっかりと作っていくことや自分の考えのほかにもいろいろな見方や考え方があることを感じ取っていくこともこの時期には重要になってくる。

「自然との関わり・生命尊重」は、自然には、草花や虫、動物などの命あるものと、水や土、石、風といった

命のないものがあり、それらに五感を通して親しむ中で、自然の美しさ、不思議さ、巧みさなどに感動し、「心がわくわくするような体験」をさせていくことが大切である。それらの体験から自然の素晴らしさを感じるとともに自然を大事にしたいという心が育っていく。さらに、自然物の中でも命あるものは関わり方によっては死ぬこともあり、命あるものが死ぬと元には戻らないという経験から、命の不思議さや尊さに気づき、命あるものを大切にすることが育まれていく。

ここでは、目指す子供の姿が到達目標ではなく、「～するようになる」といった表現となっている。保育者はこれらの遊びの中で子供が発達していく姿を念頭に置いて、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくり、その場に合った適切な援助を行ったりするなど、指導に関わっていく際に考慮することが求められている。

(2) 幼児期から体験させておきたい「自然体験」

幼児の興味や関心は生活の中で様々な対象に向けられて広がっていく。生活の場が家庭から地域、幼稚園へと広がるにつれて、幼児は、興味や関心を抱き、好奇心や探究心を呼び起こされるような様々な事象に出会うことになる。その対象の中でも身近で起こる自然の変化のある事象に対しての子供の興味や関心は、他の子供や保育者などと感動を共有したり、共にその対象に関わって活動を展開したりすることによって広げられ、高められていく。また、一人では興味や関心を示さなかった自然事象に対しても他の子供の感じ方に接することによって、あるいは、保育者の適切な援助などによって、自分もそれに興味や関心をもつようになる。

これまで自由に個々の子供の興味や関心を大事にして様々な環境の中で遊ばせる中で、子供の主体的な力が発揮され、生きる力の基礎が培われてきたが、幼稚園教育は、その後の学校教育全体の生活や学習の基礎を培う役割も担っている。そこで、小学校以降の子供の発達を見通した上で、小学校の生活科や理科の目標・内容、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見据えて、幼児期から体験させておくことが望ましい「自然体験」を抽出してみた。

○自然に親しみ、自然を五感を通して感じる体験

子供は身の回りの様々な自然の事象に五感を通して遊ぶ中で、その大きさ、不思議さ、美しさ、神秘さ、巧みさなどを感じ、心を揺れ動かす。自然の事象との関わりの中で生まれる体験こそが、子供の本来もっている自然の事象に対する感性を磨いていくことにつながる。特に自然の事象は多様であり、子供の発達段階、興味や関心等に応じて、多種多様な関わりをもつことができる。幼児期においては、目で見たり、耳で聞いたり、肌で触れたりなど五感を働かせることを通して、自然と触れ合うことの心地よさをいっぱい体感させ、自然を感じる心を育てることが大切であると考え。

○身近な自然の事象への好奇心や探究心を生み出す体験

幼児期の子供は、ダンゴムシなどの動く生物や砂場の砂など、常に自分を取り巻く自然の事象に興味や関心を持ち、それらに親しみをもって関わり、働きかけていく。面白そうなものを見つけると、じっと見入ったり、触れたり、試したり確かめたりして、「これは、何かな」あるいは「こうなるのは、どうしてなのかな」など、子供なりに探り、理解しようとする。それは、あくまでも子供なりの論理であり理解ではあるが、子供が心ゆくまで試したり、確かめたりして最終的に自分なりに納得していく過程で、満足感や充実感、達成感を味わうことが、更なる未知の世界に対する好奇心や探究心を培うことにつながっていくと考える。

○身近な自然の事象のきまりや規則性等を自らの生活や遊びに取り入れていく体験

幼児期の子供は、遊びや生活の中で興味や関心をもったものや事柄に繰り返し関わりながら、新たな発見をしたり、どうすればもっと面白くなるかなど、子供なりに考えたりする。ときには、それらを別な場所に持ち出して活用したり、新たな使い方を見つけたりして、遊びや生活に取り入れていく。こうした体験は、よりよい生活を自らつくり出していく力につながっていく、極めて重要な体験であると考え。

(3) 小学校との接続を見据えた教育課程の必要性

今回の幼稚園教育要領の改訂で示された資質・能力は幼稚園から高等学校までを貫くものであり、当然幼稚園で育まれた「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の3

つの資質・能力は、小学校へとつながっていく。

小学校学習指導要領においても小学校の各教科等においては、生活科を中心としたスタートカリキュラムの中で、合科的・関連的な指導を行うこととされている。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が発揮できるような工夫を行いながら、幼児期に育まれた資質・能力を徐々に各教科等の特質に応じた学びにつなげていくことの重要性も示されている。

今後、幼稚園では小学校の「生活科」「理科」で育てる資質・能力を具体的に理解した上で、幼児教育の遊びの中で、どのような「自然体験」を環境構成の中で意図的に仕組んでいけばよいのかを考慮していく必要があると考える。現状としては、幼児教育と小学校教育との接続では、子供同士や保育者・教員の交流は進んでいるものの、教育課程の接続が十分であるとは言えない状況がある。このことにより、遊びや生活を中心とする幼児教育と、教科等の学習を中心とする小学校教育とでは、教育の内容や方法が異なっていることが大きな段差となって、スムーズに適応できない児童が発現する「小1プロブレム」が生じている。

このような状況の中、幼児教育と小学校教育における教育内容や方法を十分理解した上で、保育者は「今の学びが小学校以降どのようにつながって育っていくのか」を、小学校の教員は「今の学びが保育所や幼稚園ではどのように育ってきたのか」を見通し連続性を大事にした「アプローチ」「スタート」の教育課程の編成・実施が強く求められている。

Ⅱ 研究の目的と方法

自然と触れ合う機会が減少しつつある昨今、小学校以降の教育で必要とされる「原体験」としての「自然体験」を幼稚園教育と小学校教育を円滑に接続させる立場から、幼稚園の教育課程の中に「自然体験」活動をどのように位置付け編成していけばよいか、下記の目的を掲げて研究を進めていくことにした。

- ① 「自然体験」活動を特色とした教育課程を編成する際の基本的な考え方を明らかにする。
- ② 幼稚園で体験させておきたい「自然体験」活動とその体験が生かされる小学校「生活科」「理科」の学習及び教育課程編成上の留意点を明らかにする。
- ③ 小学校との円滑な接続及び自然体験を重視した教育課程（アプローチカリキュラム）作成の手順を明らかにする。

これらの研究の目的を達成していくために、「幼稚園教育要領解説」「小学校学習指導要領解説 理科編」「小学校学習指導要領解説 生活科」、関連する幼稚園での実践例や文献等を参考に研究を進めていくことにした。

Ⅲ 研究の実際

教育課程を編成するにあたって、すべての幼稚園には、各園独自の「教育目標」が定められている。幼稚園教育は学校教育の始まりとして、幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼児期にふさわしい生活を通して、幼稚園教育の目的や目標の達成に努めることが必要である。このため、幼児の発達を見通し、その発達が可能となるよう、それぞれの時期に必要な教育内容を明らかにし、計画的に指導することが求められる。

このような意味から、幼稚園教育において育みたい資質・能力を踏まえつつ、幼稚園の実態、地域の実態、幼児の実態、保護者の願い等を基に、幼稚園における教育期間の全体にわたって、幼稚園教育の目的・目標に向かってどのような過程で教育を進めるかを明らかにし、幼児の充実した生活を展開できるような計画を示す教育課程を編成して教育を行う必要がある。

ここでは、近年の子供たちの家庭や地域での自然体験の減少を考慮して、小学校とのスムーズな接続も見据えながら、「自然体験」活動を重視した教育課程の在り方を構想していくことにする。

1 「自然体験」活動を重視した教育課程編成の基本的な考え方

幼稚園での生活を教師と幼児がしていく中で意図的、計画的に自然事象に出合わせ、その自然体験によって起こる驚きや発見、感動等を共有し、共感することによって小学校以降の目標でもある自然を愛する心情が育まれていくものと考ええる。

感動的な自然体験を教育課程の中に入れ込んでいく際に次のような点に留意する必要がある。

(1) 幼児目線の自然の捉え方を理解する。

幼児にとっての身近な自然の事象は動植物、砂や土や水、光などであり、それを含めた園内外の自然である。幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の雄大さ、美しさ、巧みさ、不思議さなど直接体験を通して、幼児の心の安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われる。このことを踏まえて、幼児が自然と関わりを深めることができるように工夫することが大切である。

このような自然と触れ合う体験を十分に得られるようにするためには、園庭の自然環境を整備したり、地域の自然と関わる機会を作ったりして、幼児が身近な自然と関わるように配慮しておくことが大切である。また、幼児が心を動かす場面は必ずしも大人と同じでないことに留意し、幼児が自然事象と出会う場面を見逃さないようにするためにも、幼児の発達段階に応じた理解やその際の対応の仕方について環境構成として教育課程の中に位置付けておくことも大切である。

(2) 身近な自然事象に関わらせる。

身近な自然環境にある様々な自然事象に対して積極的に関わろうとする態度は、身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自然に関わろうとする意欲を育てるとともに、様々な関わり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする心、公共心、探究心などが養われていく。

そこで幼児が日常的に自然に触れる機会を通して、季節の変化に気付いていくようにすることが重要になってくる。そのためには、幼稚園生活の自然の中で季節の変化を感じ取れるように適切な時期を意図して教育課程の中に位置付けていくことが大切である。具体的には、どの時期に幼児の親しみやすい動植物があり、それらに触れる機会をどのようにもたせることが、それらに親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、いたわったりしていくことにつながっていくのかを想定しておく必要がある。

(3) 保育者は幼児の自然への関わりを深めるような援助をする。

幼児に感動的な自然体験をさせていくためには、幼児を取り巻く環境を重視し、様々な刺激を与えながら幼児の興味や関心を引きだし、幼児が感動するような魅力ある豊かな自然事象に出合わせることが大切である。

幼児に自然事象との感動体験を味わわせるためにはどのような環境の下で生活しているのか、周囲の人物・物的環境との関わりや積み重ねと密接に関係している。だからこそ、保育者が幼児の感じている心の動きを共感的に受け止め、理解することが大切であり、次のような物的・人的環境を教育課程を編成する際に留意しておく必要がある。

- ・ 自然環境の特性を生かし、幼児の興味や関心を引き出せる状況をつくる。
- ・ 幼児の能動性を引き出す自由な空間や物を配置する。
- ・ 保育者自身が感動する心をもって幼児と共に感動する。
- ・ 幼児がふとしたときに示すつぶやき等を見逃さずに共感する。
- ・ 幼児が身体的感覚（五感）を呼び覚まされ、心が湧き立つ出合のできる工夫をする。
- ・ 幼児が様々な気持ちを引き起こすような豊かな環境の構成をする。
- ・ 身近な自然事象や動植物と関わるができるような声掛けや援助をする。

(4) 小学校「生活科」の学習内容を理解しておく。

小学校では入学時の新入生が、幼稚園での学びを円滑に小学校での学習に取り組めるように生活科を中心に合科的な指導がスタートカリキュラムとして配慮されるようになってきている。

「生活科」のねらいと育成する資質・能力は次のとおりである。

生活科の目標「具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活をゆたかにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す」

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会や自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。【知識及び技能の基礎】
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。【思考力、判断力、表現力等の基礎】
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。【学びに向かう力、人間性等】

生活科では、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなど直接対象に働きかける活動や体験学習が重視され、そこでの楽しさや気付きなどを言葉、絵、動作、劇化など多様な方法によって表現する活動で幼稚園での「遊び」を意識するとともに3年生から始まる理科や社会の学習内容も見据えながら作成されている。一方、幼稚園教育では、幼児期の発達に応じて子供の生きる力の基礎を育成するもので、自然事象に関しては、「環境」領域の内容として、下記のように示されている。

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。

このように、小学校の生活科等の身近な自然事象等を対象にした活動や体験的な学習に、幼稚園での学びが、円滑に接続していくようなアプローチカリキュラムも年々各々の幼稚園で創意・工夫され充実しつつある。

2 幼稚園で体験させておきたい「自然体験」活動とその体験が生かされる小学校「生活科」「理科」の学習内容及び教育課程編成上の留意点

小学校以降の学校教育での教育内容（生活科や理科等）を見据えて、家庭や地域の状況によって生じる体験の「格差」を可能な限り減少させ、自然事象に関する原体験を少しでも多く幼児教育の場において、意図的に位置付けていくことは重要なことであると考えられる。

そこで、子供たちが体験することが望ましいと考える「自然体験」活動を次のような条件で選択することにした。

- 幼稚園教育要領の育みたい資質・能力としての「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」に則った活動内容であること。
- 教育課程に位置付けられることを前提に、子供の発達段階や小学校の生活科や理科の学習に三つの能力・資質と関係性があり結びつく活動内容であること。
- 現在の子供たちが、これまでの自然環境や社会環境等の変化によって以前体験できた自然体験ができにくくなってきているという現状から意図的に自然体験の場を設定していく必要がある活動内容であること。

以上のような条件を踏まえて、様々な自然の事象を対象にした活動の中から、「植物と関わる力を育てる遊び」「動物と関わる力を育てる遊び」「自然事象と関わる力を育てる遊び」「身の回りの物や用具に関わる力を育てる遊び」について教育課程編成上の留意点を具体化していくことにした。

(1) 植物と関わる力を育てる遊び

幼児は数多くの種類の植物を野原や道端、森、畑、園庭などで目にすることができるが、動物のように目に見えるような動きをしなかったり、ものを食べたりすることが見られないため、生き物として理解するまでに時間と経験が必要である。したがって、植物と関わる力を育てることは、植物も生き物であることへの興味や関心を高めていくことにつながっていくと考える。

○植物と遊ぶ体験【例】

- ・シロツメクサやレンゲ、タンポポなどの草花の花摘み、集めた花を使った首飾り・腕輪・指輪づくり
- ・イチョウやモミジなどの落ち葉やドングリなどの木の実を使った押し葉やこま作り
- ・身近な野菜のナスやサツマイモ、ジャガイモを使った動物の造形
- ・サツマイモやジャガイモ、カボチャのヘタを使ったハンコ作り
- ・赤や紫などのきれいな花や葉を使つての色水づくりやあぶり出し

○植物を育てる体験【例】

- ・季節の移り変わりによって植物が変化することに気づき始める4、5歳児に園庭で育てる植物としてチューリップやパンジーなどの栽培体験
- ・植物が季節の変化に適応とていることや種が赤ちゃんであり、植物も生命をもつ「生き物」であるということを実感させるために、種まき、芽生え、生長、開花、結実の様子と、その間の水やりなどの世話体験
- ・栽培の容易なトマト、ナス、ピーマン、ジャガイモ、サツマイモなどの栽培と収穫体験後の調理、試食体験

○小学校との接続

【生活科】

内容	学習対象・学習活動等	知識及び技能の基礎	思考力、判断力、表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等
(7)	・動物を飼ったり植物を育てたりする活動を行う。	・それらは生命をもっていることや成長していることに気付く。	・それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかける。	・生き物への親しみをもち、大切にしようとする。

【理科】

- ・身の回りの生物（3年）：生物は、色、形、大きさなど、姿に違いがあること。
- ・季節と生物（4年）：動物の活動は、暖かい季節、寒い季節によって違いがあること。
- ・植物の発芽・成長・結実（5年） ・植物の養分と水の通り道（6年） ・生物と環境（6年）

○教育課程編成の際の留意点

- ・植物のある公園や森等の安全面、植物の現状把握のための下見等事前準備を行っておく。
- ・四季を通じて幼児が自由に行動（見る、嗅ぐ、摘むなど）ができるような植物環境を園内に設ける。
- ・事前に園内で育っている雑草の群落の植物名や野菜園の野菜等について確認しておく。
- ・樹木については、公園や園庭で種類を調べておき、落葉樹か、常緑樹か、いつごろどんな花が咲くか、秋には紅葉するかなど調べておく。
- ・プランターや花壇で育てる教材としては、できるだけ幼児の身近な植物であるパンジーやチューリップなど育てやすく、強い植物が望ましい。また、樹木としては落葉樹、花が咲き、実のなる木が望ましい。
- ・保育者は、植物についての正しい知識と草花遊びや種まきなどの示範ができるよう事前に体験しておき、幼児の関心を引き付け、幼児と共に喜び合える工夫が大切である。

(2) 動物と関わる力を育てる遊び

幼児は、自分の目で見たり、触ったり、においを嗅いだりなど五感を通した直接体験の中で動物を生き物として実感し認識し、それを積み重ねるたびに動物への親しみも増してくる。したがって、動物へ親しみをもって関わるようにさせるためには、直接体験の機会を増やしていくことが大切である。また、動物は、餌をやったり住み家を作ったりするなどの関わりによって成長し、いろいろなしぐさや変化を見せてくれたり、幼児の扱いに対して様々な反応を示したりする。そのことによって動物愛護の心も育っていくと考える。

○動物と遊ぶ体験【例】

- ・よく動き回るウサギやチョウ、ダンゴムシ、アリ、カブトムシ、セミ、トンボなどと自由に遊ぶ体験。
- ・遊ぶ中で小動物や昆虫などに対して引っ張ったり、投げたり、つまんだりする行為によって生き物が死んでしまう場合があるが、「死」を隠すのではなく、どうしたら死んでしまうことがないようになるのか考える体験。
- ・動物と遊ぶ中で、興味や関心が高まるとともに遊びの内容も深まり、動物のもつ形態や習性上の特徴に気付く体験。

○動物を育てる体験【例】

- ・虫探しをして捕まえてきたダンゴムシなどが気持ちよく住めるような住み家を準備し飼う体験。
- ・虫が何を食べるのか、雄と雌の区別はどこで見分けるのか、どのようにして鳴いているのか、など幼児が考えながら、よりよい飼育の方法に気付く体験。
- ・身近な昆虫としてモンシロチョウやツマグロヒョウモンを卵から成虫まで育て昆虫の一生を観察する体験。
- ・小動物としてメダカやオタマジャクシを育てその変化の様子を楽しみながら育てる体験。

○小学校との接続

【生活科】

内容	学習対象・学習活動等	知識及び技能の基礎	思考力、判断力、表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等
(7)	・動物を飼ったり植物を育てたりする活動を行う。	・それらは生命をもっていることや成長していることに気付く。	・それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかける。	・生き物への親しみをもち、大切にしようとする。

【理科】

- ・身の回りの生物（3年）
- ・季節と生物（4年）
- ・動物の誕生（5年）
- ・生物と環境（6年）

○教育課程編成の際の留意点

- ・動物と親しくなるためには「動物は人間ができないことでも簡単にできる」「動物は人間の思うようにはいかない場合が多い」ことを念頭において接するようにすることが基本である。

- ・保育者自らが動物に親しみを持ち、動物の習性や生理をよく理解しておくことが重要である。
- ・幼児に動物と触れ合う直接体験をさせることは、屋外での遊びが激減している現代社会においては、人間らしく生きるための心情が培われる意味で極めて重要な活動であるので、幼稚園の実態に応じて意図的に仕組んでいく。
- ・動物と関わらせるときは、どんな変化をするか、他の動物とどこが違うかなど目的意識を持たせワクワク感やドキドキ感が高まり感動を伴って関わるようにする。
- ・幼児は保育者の昆虫との関わりをじっと注視しているので、虫に対して苦手意識があってもそれを乗り越えて適切な関わりが幼児にできるように指導する。
- ・自己中心的な扱い方によって「動物は人間の思うようにはならない」ことを体感し、「いたみ」がわかるようになるとともに動物に対しての「いたわり」の気持ちが芽生えていくような援助をする。
- ・幼児の行為が動物を虐待しているように見える場合でも、いきなり叱らずに、今何をしているのかやさしく聞くなど、コミュニケーションを取りながら、改めるべきところがあれば示唆や助言をするようにする。

(3) 自然現象と関わる力を育てる遊び

幼児の身近で起こる自然現象には、雨や雪などの天気に関わる気象現象、また太陽や月、星などの天体に関する様々な現象などがある。これらは、地球上の日本に季節をつくり出し、一定の規則性を生み出している。戸外での自然体験が減少している現代の子供に、全身で日光を受け、外気に触れさせながら、上空で起こる雲の形や動き、雨や雪、雷などの現象、そして地上で起こる氷や霜柱、流れる雨水などの現象に目を向けさせ、大自然の美しさや雄大さを体感させるようにすることが大切であると考えられる。

○気象現象と関わる体験【例】

- ・天気は晴れや雨が続くのではなく日によって変わることやそれらの特徴に気づく体験
- ・雲にはいろいろな形があり、動いたり形を変えたりすることに気づく体験
- ・雪や氷を使って遊びながら、暖かくなると溶けて水になることに気づく体験

○季節を感じる体験【例】

- ・春夏秋冬の各々に出てくる昆虫の種類や季節による植物の変化等に気づく体験
- ・暑さや寒さなどの気象現象から季節の違いを感じる体験
- ・着るものなど身近な生活やお正月などの地域行事から季節を感じる体験

○天体現象と関わる体験【例】

- ・太陽が美しく輝く朝日、夕日、雲間から見えるまばゆさを感じる体験
- ・太陽・月・星のもつ美しさ、不思議さについて直接的・間接的に関わる体験
- ・お月見の満月だけでなく三日月、半月と形が変わることに気付く体験
- ・七夕や十五夜などの行事と関連付けて星や月を見る体験

○小学校との接続

【生活科】

内容	学習対象・学習活動等	知識及び技能の基礎	思考力、判断力、表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等
(5)	・身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を行う。	・自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに関心を持つ。	・それらの違いや特徴を見付ける。	・それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。

【理科】

- ・太陽と地面の様子（3年）
- ・季節と生物（4年）
- ・天気の様子（4年）
- ・月と星（4年）
- ・天気の変化（5年）
- ・生物と環境（6年）

- ・月と太陽（6年）

○教育課程編成の際の留意点

- ・気象や天体等については家庭との連携を図るようにする。例えば七夕などは家で短冊に七夕星を見ながら願いを作成させたり、日常的に天気について話題にしたりして興味や関心を高めるようする。
- ・気象や天体の自然現象に対して、自分の目で見たことについて雲はふわふわとか星はキラキラなど観察したものの言葉や絵による表現の仕方も獲得させていくように、指導計画の中に予想される活動も表記しておく。
- ・夏に手で触ったときは暑かったのに、冬に同じものを触ると冷たく感じる体験などから季節を体感できる場を計画的に設定したり、声掛けなどをしたりする。

（4）身の回りの物や用具に関わる力を育てる遊び

○石・砂・水などを使って遊ぶ体験【例】

- ・砂で山を作り、トンネルを掘って穴を通す体験。
- ・砂場で水を使ってため池や川を作る遊びを通して、砂に掛けるとその勢いで砂が削れていくことの体験。
- ・乾いた砂と湿った砂の性質の違いを手の感触で気づき、それを利用して土団子をつくる体験。
- ・プリンカップなどに砂を詰めて、型抜きをして造形を楽しむ体験。
- ・いろいろな形や色をした石を生かした造形を楽しむ体験。
- ・風車をつくって風に向かって回して遊ぶ体験。
- ・紙コップに紐をつけて糸電話を作ったり、いろいろな音の出る楽器を作ったりして遊ぶ体験。

○磁石を使って遊ぶ体験【例】

- ・磁石を使って磁石につく物、つかない物を魚に見立てて釣って遊ぶ体験。
- ・身近にあるいろいろな物に磁石を近づけて磁石につくものを探す体験。

○影を使って遊ぶ体験

- ・晴れの日には園庭で影ふみのゲームや自分の影を使って遊ぶ体験。
- ・光をあてた物の形をもとに何かを当てて遊ぶ体験。

○小学校との接続

【生活科】

内 容	学習対象・学習活動等	思考力、判断力、表現力 等の基礎	知識及び技能の基礎	学びに向かう力、人間性 等
(5)	・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして遊ぶ活動を行う。	・遊びや遊びに使う物を工夫してつくる。	・その面白さや自然の不思議さに気付く。	・みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

【理科】

- ・磁石の性質（3年）
- ・光と音の性質（3年）
- ・風やゴムの働き（3年）
- ・太陽と地面の様子（3年）
- ・雨水の行方と地面の様子（4年）
- ・空気と水の性質（4年）
- ・流水の働き（5年）
- ・土地のつくりと変化（6年）

○教育課程編成の際の留意点

- ・保育者自身が、物質の見方を養い、教材・教具に対して科学的な扱い方に慣れ、その活用を幼児の遊びと一体的に考えておく必要がある。
- ・保育の中で利用する物や用具の年間を通しての活用計画表を作成しておく。
- ・物や用具による遊びは、簡単な遊びから幼児自らが遊びの質を高めていけるような用具の準備や保育者の「これからどうしていきたいの」などの幼児の想いや願いを引き出す声掛けをする。

- ・ いろいろな遊びをした後の結果や共に体験した喜びを一緒に味わい、物や用具を使った効果を確認め合うようにする。

3 小学校との円滑な接続及び自然体験を重視した教育課程（アプローチカリキュラム）作成について

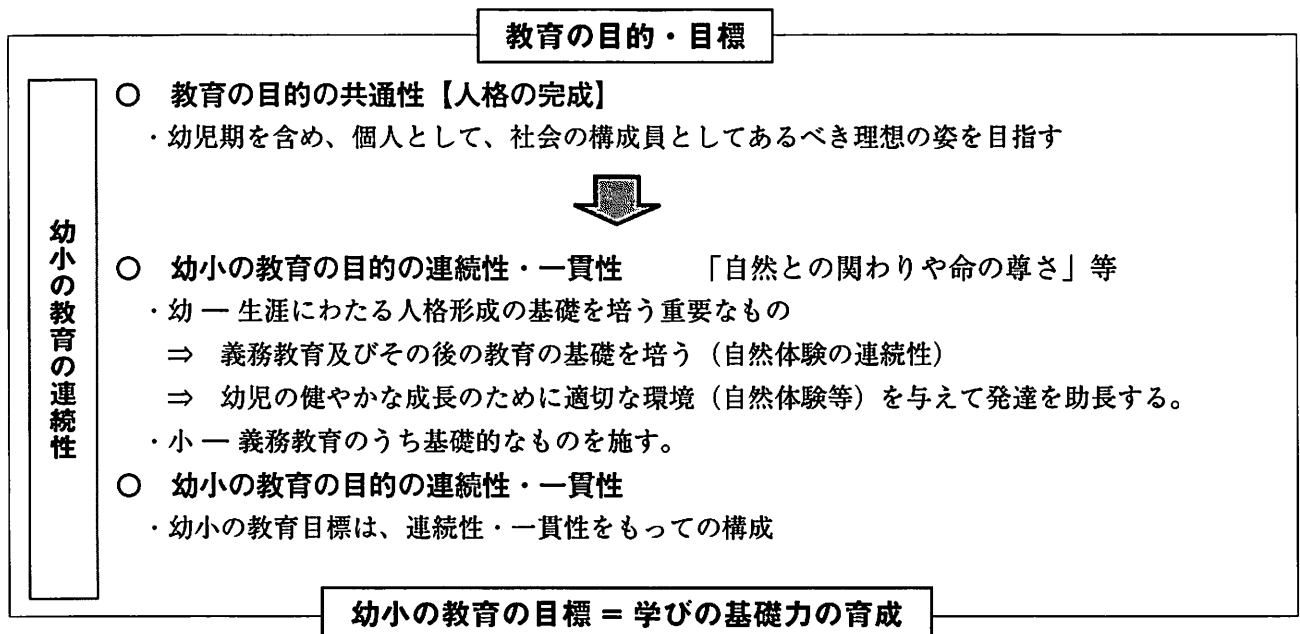
教育課程は、各幼稚園が幼稚園教育要領を踏まえ、教育理念や目標をより具体的に明示したもので、それぞれの園の実態に応じて独自に編成するものである。特に「小1プロブレム」の解消に向けての小学校との円滑な接続や幼児期の自然体験が十分でないという実態等から、小学校以降の教育内容を理解した上で自然体験を重視した教育課程を編成していくことは重要なことであると考えられる。

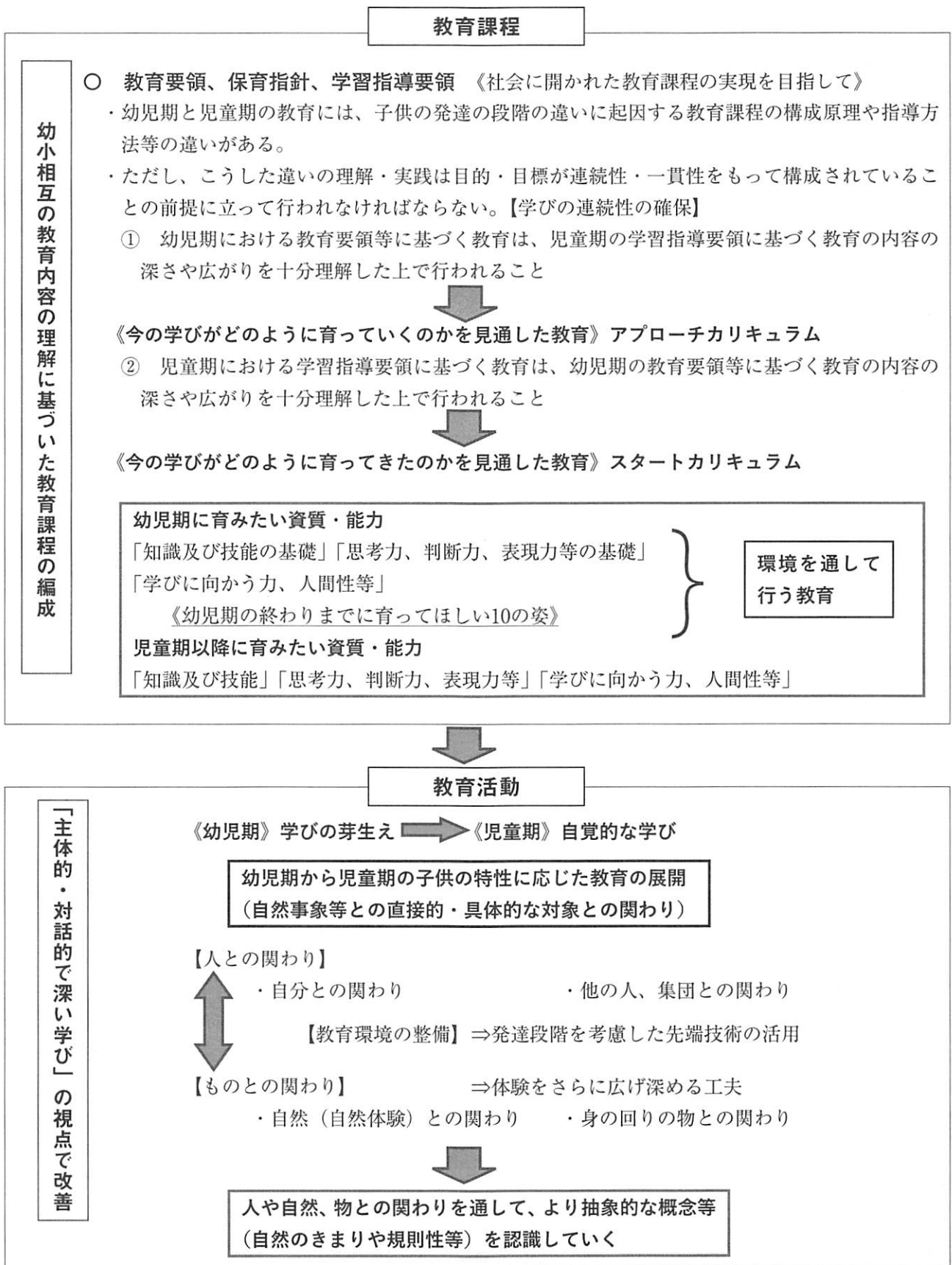
そこで、円滑な小学校との接続を行っていくためには、自然体験の位置付けも含めてアプローチカリキュラム（幼稚園）とスタートカリキュラム（小学校）の両方のつながりについて明らかにしておくことが重要になってくる。そのためには、幼稚園と隣接する小学校と双方の教育課程の編成について協議を行う必要があると考える。

接続の視点としては「子供の経験の連続性」が極めて重要となってくる。例えば、自然との関わりや命の尊さについての学びは、幼児期だけではなく、就学期以降にも連続性のあるものと考えられる。小学校の学びはゼロからスタートするのではなく、幼児期の学びの上に育まれるものであり、幼小接続を考える上で、幼児期の学びがどのように発展していくのか理解することが重要である。小学校におけるスタートカリキュラムは、幼児期に総合的に育まれた知識や能力を、徐々に各教科等の特質に応じた学びにつなげていく内容である。小学校では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を考慮しつつ教育活動を実施することが求められている。

このことから、保育者には幼児教育終了後の子供の姿を見越す力、小学校教師には入学前の子供の経験を生かす力が必要であり、その力を駆使して「子供の経験の連続性」を大事にしながら双方の教育課程を作成していく必要がある。幼児から児童期にかけての教育の構造は下図の通りである。

幼児期から児童期にかけての「子供の経験の連続性」を大事にした教育の構造





この幼小接続の体系的理解のもとに自然体験を重視した具体的な教育課程編成の手順としては下記のこと留意しながら作成していく必要がある。

- ①自然体験を特色とした編成に必要な基礎的事項についての理解を図る。
 - ・関係法令、幼稚園教育要領、幼稚園教育要領解説などの内容について共通理解を図る。
 - ・幼児期の発達、幼児期から児童期への発達についての共通理解を図る。
 - ・自然体験に関する幼稚園や地域の実態、幼児の発達の実情などを把握する。
 - ・自然体験の重要性等社会の要請や保護者の願いなどを把握する。
- ②各幼稚園の教育目標に関する共通理解を図る。
 - ・自然体験の意義を含めた現在の教育が果たさなければならない課題や幼児の発達段階に応じた期待する幼児像などを明確にして教育目標についての理解を深める。
 - ・年長児においては、小学校との円滑な接続を意識して幼児期の終わりまでに育ってほしい具体的な姿についての共通理解を図る。
- ③自然体験等をととした幼児の発達の過程を見通す。
 - ・幼稚園生活の全体を通して、幼児が自然体験等を通してどのような発達をするのか、どの時期にどのような生活が展開されるのかなどの発達の節目を探り、長期的に発達を見通す。
 - ・接続後の学習過程等の重要性を踏まえ、具体的な自然体験活動等の中で、比べる、関連付ける、総合するといった、思考の過程を示すなど、思考力の芽生えを育むようにする。
 - ・幼児の発達の過程に応じて教育目標が自然体験等を通してどのように達成されていくかについて、およその予測をする。
- ④自然体験等を踏まえた具体的なねらいと内容を組織する。
 - ・幼児の発達の各時期にふさわしい体験が展開されるように適切なねらいと内容を設定する。その際、幼児の自然体験等の生活経験や発達の過程などを考慮して、幼稚園生活全体を通して、幼稚園教育要領に示された事項が総合的に指導され、達成されるようにする。
 - ・身近な自然や生活の中にある、何気ない音や色に気付き楽しむことが、幼児の豊かな感性や自分なりの表現を培う上で大切であることから、自然や生活の中にある音や素材に触れる機会を増やすようにする。
 - ・実際の指導計画作成段階では、幼小交流・連携計画、自然体験活動等の環境構成や授業の工夫、援助・支援や指導のポイント・配慮、家庭との連携、特別支援教育の視点等が位置付けられようにする。
- ⑤教育課程を実施した結果を評価し、次の編成に生かす。
 - ・教育課程の改善の方法は、幼稚園の創意工夫によって具体的には異なるが、次のような手順が考えられる。
 - ア. 自然体験活動の具体的な子供の姿を基にした評価の資料を収集し、その妥当性等について検討する。
 - イ. 自然体験活動等について整理した問題点を検討し、原因と背景を明らかにする。
 - ウ. 幼児期の終わりまでに育ってほしい具体的な姿を基に次年度の教育課程の改善案をつくり、実施する。

VI おわりに

本稿では、幼稚園と小学校との円滑な接続が求められている中、教員間の年数回の行事や研究会などの交流はあるが幼小の接続を見通した教育課程の編成の協議までは十分至っていないという現状を踏まえて、自然体験の連続性を中心に小学校の生活科や理科等の教育内容を意識した教育課程の編成の在り方に言及してみた。

今回の幼稚園教育要領改訂で保育内容「環境」では、自然を対象にした遊びの中で様々な事象に興味や関心をもつことで、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えることが主体的な活動につながっていくと示されている。この幼児期の自然から得た「学びの芽生え」が基礎となって、小学校の生活科においては自ら動植物に関わるための活動目標につながっていく。そして、3年生から始まる小学校理科の目標に示されている「考え方」としての「比較する（3年）」「関係付ける（4年）」につながっていくものと考えられる。

このように小学校においては、幼児期の終わりに、自然事象等との関わりの中で得られた「学びの芽生え」を土台に主体的な学びへと発展していく。そして、その小学校での学びは、中学校や高等学校、大学へと連動

していき、さらに社会生活を送る上で様々なことを学びとっていく基礎となっていく。今後の一人一人の子供の充実した学びを見据えて、円滑な接続のためにも「自然体験」をキーワードに教育課程のつながりを意識し、よりよい教育課程の創造について幼稚園と小学校が丁寧に協議していくことが必要であると考え。

【参考文献】

- ・国立青少年教育振興機構総務企画部（2010）「子供の体験活動の実態に関する調査研究」報告書
- ・鹿児島大学教育学部附属幼稚園（2018）「鹿児島大学教育学部附属幼稚園研究誌」
- ・山本裕之 平野吉直 内田幸一（2005）「幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究」
- ・文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説 理科編」
- ・文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説 生活科編」
- ・文部科学省（2018）「幼稚園教育要領解説」
- ・鹿児島国際大学附属鹿児島幼稚園（2020）「鹿児島幼稚園の教育」
- ・無藤隆/編著（2017）「幼稚園教育要領 まるわかりガイド」
- ・近藤幹生監修 徳安敦・瀧川光治・杉浦広幸/編著（2018）保育内容「環境」青踏社
- ・小田豊監修 奥井智久・芦田宏/編著（2008）「新子供と環境」三見書房
- ・園田雪恵（2017）「保育内容「環境」と小学校教育課程とのつながり」
- ・環国立教育政策研究所教育課程研究センター（2014）「環境教育指導資料〔幼稚園・小学校編〕」
- ・瀧川光治（2017）「小学校理科の基盤となる幼児期の保育内容と方法」大阪総合保育大学紀要第12号
- ・岡健（2019）「演習 保育内容「環境」 基礎的事項の理解と指導法」建帛社
- ・森本信也・磯部頼子（2011）「幼児の体験活動に見る『科学の芽』」学校図書
- ・無藤 隆編（2018）「育てたい子供の姿とこれからの保育」ぎょうせい
- ・山本裕之・平野吉直・内田幸一（2005）「幼児期に豊富な「自然体験」活動をした児童に関する研究」
- ・鮫島準一（2020）「保育指導『環境』領域における「自然体験」の構想～小学校『生活科』『理科』との接続を見据えて～」鹿児島国際大学福祉社会学部論集 第38巻第4号

The plan of Curriculum focused on “Experiences in a natural environment” In Childcare Content “Environment”

～To embody conjunction between “Experiences in a natural environment” and elementary school curriculum～

Junichi SAMESHIMA

Kindergarten teaching procedures and Course of Study were revised, and Childcare Content “Environment” is recommended to reconsider content which is cooperate with elementary school, in the context of not going smoothly in conjunction between preschool and elementary school. This thesis tries to be clear points to design curriculum which is focused on “Experiences in a natural environment” to connect elementary school through study of “Environment”

Key Words: Curriculum, Experiences in a natural environment, Connection between kindergarten and elementary school, Childcare Content Environment, Science